

香雪美術館蔵《レパント戦闘図屏風》—主題同定と制作環境の再検討—

岡田 裕成 (大阪大学)

初期洋風画の名品、香雪美術館のレパント戦闘図屏風は、紹介者となった西村貞氏による論考において、その主題が特定された。しかし、主に陸戦を描く本図が確かにレパント海戦をあらわしているのかは、これまでも坂本満氏らにより疑問が呈されてきた。ただ、これについて実質的な対案が提示されることはなく、キリスト教徒とイスラム勢力との闘争を「一般化」してあらわしたものの、といった解釈のもとで了解が図られている。他方、日本で紹介されることの稀な近年の海外の研究には異説もある。発表者はこうした研究史を検証した上で、本図が16世紀スペインとオスマントルコの間になされた別の戦役、チュニス攻略戦を主題とすることをまず指摘する。

チュニスの攻略は1535年、スペイン国王カルロス1世がみずから出陣し、オスマントルコの支配下にあった地中海の要衝チュニスを奪った戦役である。画面左には「ろうまの王」と貼札に記される指揮官が描かれるが、これは神聖ローマ皇帝 Romanorum Imperator でもあったカルロスをあらわすと考えると矛盾がない(レパント海戦に当時の国王フェリペ2世は出陣せず、かつ彼は皇帝位を継承していない)。また画中には、すでに指摘される通り、古代ローマとカルタゴの間で戦われたザマの会戦をあらわすC. コルトの版画からの引用がある。チュニスは実は、ローマにより破壊されたカルタゴを継承する都市であり、ここで勝利を収めた皇帝カルロスは凱旋するや、ザマの会戦でハンニバル率いる象戦隊を討ち破ったローマの名将スキピオになぞらえて「新たなスキピオ」との呼称を贈られた。画中に引用される象戦隊との戦闘のモチーフは、そうした皇帝カルロスの賛美を意図したものと解される。他方、荣誉あるこのチュニス攻略は16-17世紀においてすでに、スペインのハプスブルク王家みずから、その最も偉大な軍事的勝利と認識するものであった。本図はこの意義深い戦役についての具体的な知識をもとに描かれたものと考えられる。

では、このような図像の構想はいかにして可能となったのか。戦闘図と対をなす世界地図屏風には、この点から注目される従来未検討の描写がある。

本図は1609年オランダ製の地図に基づくものとされ、これは屏風の制作年を考える前提ともなっている。他方この1610年前後は、マニラ臨時総督R. ビベロの日本漂着をきっかけになされたメキシコ副王使節の来訪など、太平洋を挟んで接した植民地帝国スペインと徳川政権の間外交交渉がにわかには活発化した時期でもあった。世界地図屏風には、この時に初めて開かれたメキシコ・日本間の直行航路に関わるとみられる地誌的要素や、家康が深い関心をもった鉱山開発との関連をうかがわせる細部などが認められる。本戦闘図・世界地図屏風は単なるエキゾティシズムの産物ではなく、日本とスペイン帝国の外交交渉の過程において制作されたものであることを指摘したい。